

日本語教育学入門

検証実施機関（団体）：甲南女子大学

甲南女子大学文学部日本語日本文化学科 准教授 和田綾子

1 検証対象の研修・授業について（該当するものにチェックを入れてください。）

養成／研修	<input checked="" type="checkbox"/> 養成 <input type="checkbox"/> 研修
タイプ	<input type="checkbox"/> 基礎教育 <input checked="" type="checkbox"/> 専門教育 <input type="checkbox"/> 支援員教育
研修・授業日（期間）	2018年 9月 27日～ 2019年 1月 17日
総時間数	12時間（ 1.5時間×8回 ）
研修・授業科目名	日本語教育学入門
受講者	人数（ 29 人） 学年（学部／大学院）：1年24人、2年2人、4年3人 専攻：日本語日本文化学科、英語文化学科、多文化コミュニケーション学科、 心理学科、総合子ども学科 外国人児童生徒等教育／日本語教育に関する経験の有無： 無

2 地域の日本語教育関係者や学校教育との関わり（大学として、あるいは教員個人で）

（1）周辺の地域の日本語教育関係者／ボランティア等との連携など

教員個人として（一個人として）、近隣の市の国際交流協会に日本語ボランティアとして登録しています。

今回のモデルプログラム検証への参加をさせていただいたことにより、地域の外国人児童生徒等への日本語・教科、母語学習などのサポートをなさっているNPO団体の活動の見学をさせていただききっかけとなり、つながりを作ることができました。

（2）周辺の学校との交流や共同研究、或いは教育行政との関係など

「外国人児童生徒等教育」分野とは少し異なりますが、大阪大学日本語日本文化教育センター教育関係共同利用拠点事業で日本語連携教育と教員共同研修に参加しています。

（3）日本語指導や外国人児童生徒教育等に関わる研修など

特にありません。

3 研修・授業の成果について

（1）（受講者アンケートより）

①受講者の研修への期待（アンケートのIより）

当該授業が1年生の科目ということもあり、受講者の期待は漠然としたもの（「日本語について知りたい」「日本語教育の勉強をしたい」「外国人児童生徒への教育について知りたい」など）が多くありました。毎年のことではありますが、「日本人として正しい日本語を学びたい」という記述もあり、その立ち位置の見直しをする授業になっていくことから、期待した授業内容とは異なっていたと感じる受講生も出るのではないかと考えていました。日本語教師や国語教員を視野に入れている受講生は、自分が実際に教える立場になった時に必要なことを学びたいという具体的な期待を持っていました。

②受講者の研修内容の理解度・満足度（アンケートのⅢ①より）

アンケートが回収できた22名のうち、7名が期待と実際の授業内容が「ほぼ一致」、15名が「だいたい一致」と回答しています。受講生自身が具体的なニーズをまだ持つ前の段階であるため、このような回答になっていると思います。

③関心を高め、教育力の向上を促したと考えられる内容・活動（受講者アンケートⅢ②の回答より）

受講者アンケートからは、「母語・母文化・アイデンティティ」「外国語としての日本語（日本語の特徴）」「外国人児童生徒の言語能力（学習言語能力、母語との関係）」についての内容が、受講生の関心を高め、受講生自身も学ぶところが多かったと感じていることが見受けられます。

実際に、子どもの本や日本の学校で使用される教科書を見せながら、そこで使用されている日本語が「やさしい日本語」とはかけ離れていることを発見したり、視聴覚資料で実際の外国人児童生徒の様子を見たり、非母語で算数の文章題を理解するときどの部分が障壁となっているかを体感してもらったりするような活動に、やはり受講生は活発に取り組みます。受講生自身が外国人児童生徒がするであろう経験を体感することが、「自分ごと」として、この分野に関わっていくきっかけとして、非常に重要だと感じます。

④受講者が今後に望む研修・授業の内容と活動（受講者アンケートⅣより）

受講生が望んでいる授業内容、活動としては、「講義形式」が最も高く、次いで「授業体験・指導案作成・模擬授業等」「事例を聞く」という結果になっています。1年次科目であるため「講義形式」が望まれることは予想できますが、事例を聞いたり、実際の授業を体験したり、指導案を作成することについても期待があるという結果が出ました。具体例等を使いながら実際の場面に即した内容に早くからもっと積極的に取り組んでもよいのかもしれない。

(2) 研修企画の立場から見た、研修の成果と課題（企画者アンケートⅢの回答より）

4. モデルプログラムについて

(1) 養成・研修内容構成（報告書 pp. 72-76）について（意見）

- ・追加が必要な項目はないか。
- ・項目の構成（配置・カテゴリー化）は適当か
- ・項目の数や具体性は適当か。

「やさしい日本語」についての項目は、このモデルプログラム検証に参加する前から当該科目のシラバスに入れていた項目ですが、今回、「外国人児童生徒等の教育」の項目とつながりがある形でシラバスに組み込めたと思います。受講者は日本社会の変容と外国人児童生徒等教育と自分たちの日常とがつながっていることを実感し、「自分ごと」として自分にもすぐにできることとして、関連付けて受け止められたようです。

項目が多数、多岐にわたるため、段階的なカリキュラムの組み立てを考える際の目安になるようなものがあれば、さらに使いやすくなるのではないかと感じました。

本学の養成課程で考えた場合、大学生・成人対象の日本語教育を中心にカリキュラムが組み立てられているため、児童生徒等を対象にした場合、従来のカリキュラムにオーバーラップする部分、関連付けられる部分、新たに加えなければならない部分を具体的に考える際に、大変参考になりました。

(2) モデルプログラム（報告書 pp. 207-244）について（意見）

- ・90分程度のモチーフ型のプログラムは、選択・組み合わせがしやすかったか。
- ・モデルプログラムは実施カリキュラム作成時に、参考になったか。
- ・講義・活動・フィールドのバリエーションは、活動を考える上で役立ったか。

モデルプログラムは実施カリキュラム作成時に、参考になりました。

自分自身が外国人児童生徒等教育に関する実践経験を持たないため、その項目に関する講義・活動のバリエーションなどは、今後、活動を考える上で参考にさせていただきたいと考えています。

(3) モデルプログラムの活用で研修の運営が円滑になったか。

- ・現場の課題と研修内容を関連付け、受講者に目的を伝えやすくなったか。
- ・企画者と講師間で研修運営についての考えを共有しやすくなったか。
- ・複数回の研修の場合には、各回の関連付けがしやすくなったか。

今回の検証で、実行したわけではありませんが、外国人児童生徒等教育を担う教員養成を考えていく際、学校教育、多文化教育など他分野の教員の協力が必要です。モデルプログラムは、そのような他分野の教員との連携には欠かせないと感じました。

(4) モデルプログラムの活用を通して、研修・養成で、どのような力を高めてほしいか。あるいは、高めるためには、どのような活用の仕方が必要だと思うか。

外国人児童生徒等教育を担う教員だけでなく、日本社会の一構成員として学んで欲しい項目がモデルプログラムには含まれていると感じます。「日本語」担当の教師、学校教員、地域社会すべてが連携し合って、すべての児童生徒を育てていく社会を目指すという意味でも、モデルプログラムの基礎的な項目のいくつかは、より多くの学生が学ぶべきだと感じています。モデルプログラムを活用して、教員養成だけでなく、元々そのような領域に関心を持っていない学生に対しても、アプローチしていけるような活用の仕方を工夫してみたいと考えています。

また、アンケートにも表れていますが、授業見学・教案作成・模擬授業等、実践的な学びの要求が受講生には見られます。実際の日本語教室での見学・実習は難しいとは思いますが、模擬実習などを従来の大人向け日本語教育実習に加えていくことが重要だと考えています。

現場では、個々の外国人児童生徒のニーズを見出し、整理し、教科の内容と連携させながら学習項目を組み立てていく力が要求されるのではないかと思います。そのような力の高め方を私自身が学ばなければならないと感じます。